

日本の国柄と日本人の品格を 映し出すODAを

拓殖大学学長
(ODA総合戦略会議・議長代理)
渡辺利夫



財団法人国際協力推進協会が設立されて一世代が経ち、その間の広報・調査活動などの来し方を記した「創立30周年の歩み」が刊行されるにいたりました。心からの祝意を申し上げます。

日本の国際協力は「顔が見えない」とよく言われますが、本当にそうでしょうか。私はそうは思いません。ひょんなことから誰かが言い出して、自虐的な傾向の強い日本人の中にそういう言い方が定着してしまったのだと思われます。

対中借款は「日本に対する感謝の念が薄い」ことを理由の一つとして、2008年までに廃止されることが決定されました。しかし対中ODAの完成案件をいくたびか観察し、中国側担当者の見解を聞く機会の多かった私は、少なくともODAに関係する中国側の技術者や管理者たちの、日本の技術システムや管理システムに対する評価が著しく高いものであることをよく知っています。

特に運輸・エネルギーなどの巨大構造物（インフラ）は、まさに技術と管理の「システムの塊」であり、個別の技術や管理手法を寄せ集めただけでは成功はおぼつきません。仮に完成しても、その持続的な運営は不可能です。

インフラの設計、建設、施行の各フェイズを通じてシステムの全体を動かす日本人技術者・管理者の高い能力と情熱。ODAでの協働作業を通じて中国人関係者は日本人から学んだことがいかに多かったかを一様に語ってくれました。反日的なセンチメントの強い中国においてさえそうです。

東南アジアの国々と日本との関係が今日のように友好的なものとなるのに、日本のODAの演じた役割にはきわめて大きなものがあります。アジアに対する、さらにはラテンアメリカやアフリカなどに対する日本のODAが、誇るに足る成果をもつものであったことを日本人自身が正しく理解しなければなりません。

ODAとて、国内の共同事業などと同じく、普通の日本人の人間集団が試みる行動です。しかも、異文化の中で価値観やルールの違う人々とともに額に汗しながら協力する行為です。国内事業と比べて、これが一段と困難なものであることは申すまでもありません。

それにもかかわらず、日本人は、特に日本のジャーナリストは、ODAを「聖域」とし、小さな瑕疵をも見逃さない不寛容さを拭うことができません。「たらいと一緒に赤子を流」してしまうかのごとき愚かな報道だといわねばなりません。

ODAとは貧しき者、虐げられし人々、弱い立場の人間に少しでも温かい助力の手を差し伸べ、そのことによって得られる人間としての誇りと晴れがましさ、幸福感を得るための営為だと私は考えます。

多少の失敗には目をつぶれ、などというつもりはありません。しかし、ODAが上述したようなものであるならば、悪しき少数の事例を取り上げてこれに容赦のない批判を浴びせるのではなく、成功プロジェクト、現地住民に歓迎されているプロジェクトを積極的に掘り起こしてこれを報道し、日本の国民に開発途上国の住民のために何がしか良いことをやっているのだという誇りと幸せを味わってもらう必要があります。

ODAの量を拡大し質を向上させ、小さな誇りと幸せを大きな誇りと幸せにつなげていく、そういう国民的な雰囲気醸成することによって日本は真のODA大国に変じていくことができるのだと私は思うのです。ODAは日本の国柄と日本人の品格を映し出す、本当に日本人らしい国際的な行動でなければなりません。

財団法人国際協力推進協会も、ODAの広報と調査のための組織であることに加え、ODAが日本の国際的信頼、信頼に由来する日本の国力の源泉であることを、国民の心に植えつける深々としたメッセージの送り手となってほしいと心から願っています。